

リアルな逆襲 | ロボットは東大の夢を見るか 人類を待つ天国と地獄

2014/1/7付 | 日本経済新聞 朝刊

「母」としては、来年は箱根駅伝に出ている(名門私立)大学のA判定がほしい」。大学や民間が持つ人工知能(AI)技術を結集して東京大学の入試に挑む「ロボットは東大に入れるか」プロジェクト。昨年12月、東京都内の代々木ゼミナールで開かれた発表会で、リーダーの国立情報学研究所教授、新井紀子(51)はこう言って会場の笑いを誘った。

(1面参照)

代ゼミのセンター模試は平均点以下だったが、私立大学の学部のほぼ半数で合格可能性80%以上の「A判定」を獲得。目標である2021年度の東大合格に向け、基礎技術を積み上げつつある。



CAテックキッズはアプリの開発を体験してもらう「クリスマスキャンプ」を開いた

コンピューター翻訳の世界でも、静かな革命が進む。単語と文法をコンピューターに覚えさせる従来手法は00年ごろ壁に突き当たったが、膨大な対訳文を統計的に分析して規則性を見つけ出す「機械学習」が突破口になりつつある。

NTTコミュニケーション科学基礎研究所のソフトは「特許の出願文書など対訳データが豊富にある分野なら90%以上の精度で翻訳できるようになった」(上席特別研究員の永田昌明)。難しいとされてきた通訳の機械化が実現する日が近づく。

「もしAIが東大に合格できる能力を持ったら社会が変わる。文章を要約できるレベルになれば、ホワイトカラーで影響を受けない職種はない」。新井はこう読む。知的労働までロボットに奪われ、十分な賃金が得られなくなれば「大学進学自体をあきらめる層が出てくるかもしれない」。

人間に残された聖域である創造性を育み、コンピューターを「使う」側の人材を育てられるのか。サイバーエージェントの子会社CAテックキッズ(東京・渋谷)は昨年、小学生にゲームやiPhoneアプリの開発を体験してもらう「クリスマスキャンプ」を開いた。「ただゲームをする消費者にとどまるのではなく、創造者になってほしい」。社長の上野朝大は子どもたちの独創性に期待を寄せる。

経済学者のケインズはすでに1930年、世界は技術革新による省力化のスピードに雇用の拡大が追いつかない「技術的失業という病」にかかっていると指摘した。だが一方で、この進歩が続けば、2030年までに人類はほとんど働かなくても食べていけるようになり「経済的問題から解放される」とも予言した。

20年後に待つのは大量失業か、労働からの解放か。答えはまだ見えない。(敬称略)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。